水が織りなす安曇野今昔物語講座　～ 明科編 第１回 ～

資　料　目　次

明科地域の位置・地形など …… 1

標高最低地（三川合流地）　河岸段丘　山地　樹枝状谷　など

多くの地区と合併した明科地域 …… 2

明治以来の２村と３村（分村）が合併

犀川沿いに多い遺跡 …… 3 ～ 5

『ほうろく屋敷』『北村』『潮古墳』『明科廃寺』『古殿屋敷』遺跡

大河（犀川・高瀬川）をめぐって　その1 …… 6 ～ 8

『八面大王神社』『川除普請』『筏改め』『犀川通船』『渡船場』『用水堰』『長野県水産試験場』『ワサビ』

大河をめぐって　その2 …… 9 ～10

『神社の祭り』（御船曳き行事）　川辺の諸施設・行事

里山をめぐって …… 11 ～13

伝説『紅葉鬼神』　『塔原城跡』　『入会山論』　里山の生産物　里山の施設

有形文化財　～寺社関係～ …… 14

多い寺・堂・神社　（県宝　2）

石造文化財 …… 15

多い石造文化財

①

水が織りなす安曇野今昔物語

～ 明科 1回目 講 座 資 料 ～　　Ｈ２３，８，６（土）

◎資料内のゴシック（太）文字は、２～３回目の講座に、関連することが多い事柄を示している。
◎『明科町史』上・下巻・自然編、『明科の社寺文化財』、『明科の石造文化財』等を中心資料とした。

明科地域の位置・地形等

明科地域は、安曇野市北東部に位置している。

総面積は、４２，１２㎢。安曇野市総面積３３１，８２㎢の約１３％を占める。

山林原野の占める割合は約６８％と半分以上。田畑は約１４％と少ない。

明科地域は、他市町村と山地の峰などで境界を作っていることが多いので、総面積の割りには、境界が入り組み・長い。（明科町時代は、動物の「リス」が座っている形に似ているなどと言っていた）

特徴としては、**松本盆地の最低地**（標高４９７，０ｍ）を持っていることである。

＊安曇野市南陸郷小泉地区（標高５０５ｍ）で、犀川は隣村（生坂村）へと緩やかに流下している。

＊**『三川合流地**（犀川・高瀬川・穂高川）**』**が明科地域にある。　『安曇節』に、♬「槍で別れた……巡り合うのは押野崎」とうたわれている「押野崎」もその一つである。**『水郷明科』**とし、河川や地下水（湧水）とのかかわりも多い。

＊仮称**「里川の文化」**を、明科地域では「里山の文化」とともに考慮していかなければならないだろう。

山地の標高最高地点は、筑北村との境界となっている『萱野峰』(944,2m)。
他市町村との境界上でなく、明科地域内にある山では、**『長峰山』**(933,5m)であり、アルプス・安曇野の展望台となっている。**明科地域の高度差は、わずか約４５０ｍ。**

犀川（高瀬川）沿いの**河岸段丘**（５つの段丘の内、第４第５段丘）上にほとんどの集落はある。河岸段丘上に、樹枝状谷からの堆積物が重なり、**小さな扇状地**を連続させている。

山地は、急斜面部分と緩斜面部分とがあり、標高約８００ｍぐらいの地点まで、小集落を形作っていることも特徴の一つであろう。

侵食されやすい地質を持つ山地では、数多くの**「樹枝状谷」**を形づくり、流水量は少なく、短い沢が多い。山地では、それらの沢から各所で水を少量求めることが出来た。

＊**「里山の文化」**が各所に存在している。

明科地域の山間地は、そのほとんどが、「青木層・小川層」とよばれている地質からなり、典型的な**『地すべり地帯』**となっている。

多くの地区と合併した明科地域

旧・明科町は、村や地区と合併して誕生した「町」である。

このため、「明科地域」とひとまとめにして述べることはむずかしい。

行政区画の変遷（近世末から~現在）

	江戸時代	明治5	明治8	昭和30~32	平成17
川手組	(下生坂村) (上生坂村) (下生野村) (小立野村) 上生野村	２２区	生坂村 ＜東筑摩郡＞		
	潮　沢村 潮山中村 潮　　村 明　科村	２３区	東川手村 ＜東筑摩郡＞	明科町 ＜東筑摩郡＞	安曇野市
	大　足村 塔　原村	２４区	中川手村 ＜東筑摩郡＞		
池田組	＜光　　村＞ (田　沢村)	……	上川手村 ＜東筑摩郡＞	…分…→明科・豊科へ …村 …→ 豊科町 ＜南安曇郡＞	
	(中之郷村) (鵜　山村)	…… ……		…分 …→ 池田町 …村 …→ 〃	
	押　野村 塩川原村 荻　原村 荻原新田村	７７区	七　貴村 ＜北安曇郡＞		
	中　　村 小　泉村 ＜寺　　村＞ (日　岐村) (峰　方村) (草　尾村)	７８区	陸　郷村 ＜北安曇郡＞	…分…→明科・池田へ …→ 生坂村 …村…→ 生坂・池田 …→ 〃	

＊明治時代以後、昭和３０年代まで、少なくても８０年間、同じ郡で、同じ村で、生活してきた人々が、昭和の大合併により、犀川をまたぎ、一部は郡を変えて、また、分村しての「明科町」誕生であった。

・**分村は、七貴村、陸郷村、上川手村で行われた。**

・現在の住所表示は、**中川手、東川手、七貴、南陸郷、明科光**となっている。

＊平成の合併により、明科町は、犀川・高瀬川をまたぎ、「安曇野市」となった。

③

犀川沿いに多い遺跡

明科地域の原始～古代の遺跡は、犀川沿いに形成された段丘の平坦面に多く発見されている。

とくに、会田川・潮沢川など小河川が犀川に流入するような場所や犀川が大きく曲流している場所などに多く発見されている。

＊明科地域のこれらの土地は、住宅密集地・公共施設などが多く、遺跡の発掘機会が多かった。
＊山間地は、地質の関係上、地すべり・土砂流出が多く、遺跡があったとしても、埋没して発見されにくい。

遺跡発見の時代的傾向としては、「縄文時代遺跡」が一番多く、「古墳・奈良～平安時代遺跡」がそれに続いている。「弥生時代遺跡」は少ない。

『ほうろく屋敷遺跡』

昭和６３＝１９８８より発掘調査。ほ場整備事業の折。現在・水田。
発掘調査面積は、一次・二次合わせて、約１３，０００㎡。

縄文時代中期～弥生時代～古・中世時代まで長期にわたっての出土品。遺構・遺物の豊富さ・種類の多さでは、明科地域随一。

土器（復元可能なもの）５００点以上。土偶６７点。……
＊広範囲の土器類……北陸系・東北系土器。北関東系や東海系土器が見られる。

石器は、石斧約３，０００点、凹石約２，０００点、石鏃約１，１００点……
＊多量の石器類……石器の製造地？　石器の集散地？　交易商？

明科地域の最北端に位置し、長野盆地と松本盆地のヒトやモノの交流要所と考えられる。
＊余談なれど、現在、国道（１９号）、ＪＲ（篠ノ井線）、高速道（長野線）が交差している場所（光）

弥生時代初期の再葬墓が１６基。
平安時代の住居址が２０軒。

『北村遺跡』

昭和６２＝１９８７より発掘調査。高速道長野線建設時。
現在・高速道長野線明科トンネル入出口。

発掘面積は約２１，０００㎡。地表より４～７ｍで出土。

縄文時代後期の遺跡（約３，６００～４，０００年前）

土器・石器
住居址……　４６軒。
墓跡……４６９基。と、人骨約３００体。（**完形人骨約１０体**）
（約３００体の人骨＝遺骨・埋葬方法は、内陸部においての考古学・人類学史上の大発見といわれている）

『潮古墳群』　（含・潮神明宮前遺跡）

明科地域では、古墳文化時代後期（６～７世紀→＜飛鳥・白鳳時代＞）の古墳が潮神明宮西側一帯から発見されている。

平成１０＝１９９８、平成１７＝２００５、２次にわたる「潮神明宮前遺跡」発掘調査。現在・一次調査分は総合福祉センター、二次調査分は道路。

１次調査で、古墳２基、須恵器・土師器・平安時代住居址３４軒などが発見された。

２次調査で、古墳１基（古墳の周溝から須恵器、古墳石室から勾玉や金環等の副葬品が発見された。）

古墳時代後期頃には、明科地域に、有力な支配者が現れていたことを示す。

特に、潮神明宮一帯に古墳が１１基発見されており、この一帯に有力者の住居が存在していたことがうかがわれる。

なお、明科地域では、他に、明科・大足・押野の山腹に古墳が数基発見されている。

『明科廃寺跡』

白鳳時代（７世紀後半～８世紀初頭）　＊大化改新=645～奈良への遷都710 頃

白鳳時代の「**布目瓦**」の発見により、長野県内最古の寺院跡と考えられるようになった。

一次発掘調査は昭和２８＝１９５３、多量の「布目瓦片」発見。個人住宅建設時

「布目瓦」のうち、「軒丸瓦」の紋様は、製作時代を知る手がかりとなることから、特に注目された。

出土した軒丸瓦のうち、「**素弁八葉蓮華文**」は、白鳳様式の後半に該当する。

＊県内で、白鳳時代の瓦が発見されているのは、善光寺他数か所。

二次発掘調査は平成１１＝１９９９、物置と思われる掘立て建物址４棟、雨落ち遺構、瓦類など出土。個人住宅立替ということから、一部分の発掘（住宅密集地のため）にとどまったが、古代寺院の中心部を想定される遺構と考えられている。

平成９＝１９９７、県道改修時・七貴塩川原の布目瓦をやいた「桜坂瓦窯址」。

平成１０＝１９９８、福祉センター建設時・古墳や副葬品出土の「潮神明宮前遺跡」。

上記２遺跡（址）を含めて、相当有力な氏族が明科地域を支配していたことがうかがわれる。

「安曇地方古代史」の究明に多大な影響と資料を提供しているのが現状。

⑤

＜参考＞

『正倉院御物』　天平宝字８年＝７６４＜奈良時代＞、信濃国安曇郡前科郷から、「調」（特産　品）として納められた、**麻布製衣袴の墨書銘**に人物名が載っている。

１，前科郷・戸主**安曇部真羊**(ヘヌシ・アヅミベ・マヒツジ)
２，国司・史生・正八位上・中臣殖栗連(ナカトミヘグリノムラジ)・梶取(カジトリ)
３，郡司・主帳・従七位上・**安曇部百鳥**(アヅミベ・モモトリ)

「倭名類聚鈔」（承平年中＝９３１～９３７）に、安曇郡の郷として、高家・八原前科・村上の４郷がみられる。各郷が現在のどの地域に当たるか、いまだ多少の議論の相違がある。「前科(サキシナ)」は、明科七貴・池田町あたりであろうと推定されている。

いずれにせよ、前科郷周辺に、「安曇部」と名乗る人物が、地域の重要な地位を担っていたことがうかがえる。

『古殿屋敷遺跡』　平成２３年７月。**青銅製「八稜鏡」**出土。

平安時代中期（１０世紀前後）のものと推定されている。この時代では、相当な有力者が所有できるもののようである。「明科廃寺」＜白鳳時代＞「衣袴の人名」＜奈良時代＞との時代差は約２００年間あるので、「古殿屋敷遺跡」の人物との関係は現段階では分からない。これからの研究に期待したい。

なお、安曇野市内では、平成６年に、穂高地域で出土例がある。（破損・径８㎝）明科地域で出土したものは、径１１，５㎝で破損していない。

＜川筋の文化（仮称－里川文化）＞

「明科地域」の「縄文時代～古代の遺跡」について、いくつかの例を取り出してみて、
『ほうろく屋敷遺跡』の豊富な石器や土器、県外様式の石器・土器の出土。
『潮神明宮周辺の古墳』の一定の地域に密集出土した古墳。
『明科廃寺址』の県下最古の一つという「白鳳時代の瓦」。
『古殿屋敷遺跡』の平安時代中期における有力者所有の「青銅製八稜鏡」。

これらの遺跡は、犀川やそれに流入する小河川近くに分布している。また、「明科地域」の水田地帯は、近世からの堤防工事により安定してきた。それ以前は、氾濫原を耕していた。段丘平坦面や山地は、水利が悪く、近世からの「タバコ」「養蚕」により経済面が向上した。
また、『北村遺跡』の縄文人骨の食性分析によると、タンパク質の７４％は、山地のクリ・ドングリ等植物性であったという。犀川などの「川魚」が食料に占める割合はそれほど高くはない。

このような地域において、古代を中心に、経済的有力者の存在が推定できることは、「三川合流の地」「松本盆地高度最低地」「周辺山地が低く陸路として利用可能地」などの自然条件が多大に影響しているものと思われる。

「川が輸送路として機能し、川筋を物資のみならず文化が伝わる」と言われた時代があったことは、先学の諸氏が述べている。しかし、その注目度は、「稲作文化」論とか「里山文化」・「海洋文化」論に比して薄いように感じている。
それは、「川筋の文化」（**仮称・「里川文化」**）のスケールが小さいこと・時代が進むにつれて、地域への貢献度が低くなったことによるとものと考えている。

「明科地域」で、犀川・高瀬川等が、交通路・輸送路・文化伝搬路として、大きな役目をはたし、交易を中心にして発展していた時代があったことを物語っている。

大河（犀川・高瀬川）をめぐって ~その1~

里の川（里川）である、犀川・高瀬川は、明科地域に住む者に、古来から、その生活に深くかかわってきた。

『八面大王神社』　～伝　説～　　＊「里山」の項で「紅葉鬼神」紹介。

「塔原村神社仏閣道法色々書上帳」（元禄１１＝１６９８、以下「書上帳」）に、「……あらかみ島　八面大王、……御札場より未申ノ間、道法九町拾弐間。」とある。この地は三川合流地で「御宝（法）田」という地名で呼ばれている。

伝承によると、八面大王の「頭部」を、安曇野最低地に葬った……という。

現在、大王わさび園に祭られているが、塔ノ原村社『犀宮社』境内にも祭られている。

『川 除 普 請』

信濃の青竜こと大河「犀川」は、古来から洪水により、その川筋を明科地域（含・豊科地域）で変えることが多かった。　＊この地域では川の高度差が少ない。

田畑が流失したり、村境が不明になったりして、犀川を挟んで東西の村々が、「川除普請（堤防工事）」の争論がおきた。

川手地方の古文書（江戸時代）から主なものを拾ってみることとする。

「光村・塔原村と重柳村方面」では、約２００年間で２０回を越す争いがあった。
「塔原村・明科村と押野村」では、松本藩手代の横山熊右衛門が敗訴の責任を負って、切腹している。
「潮方面と塩川原方面」では、訴訟費用がかさみ、塩川原村は困窮してしまった。
その他、「中村と小立野村（現・生坂村）」でも争った。

村をあげて、ときには命をかけて、争論を続けなければならなかったことは、犀川河川敷を農地化することが住民にとって重要な課題であったことを物語っている。

近代になり、堤防工事が進み、洪水被害は少なくなっていったが、昭和３４年・昭和３６年の大規模な水害などがあり、「治水」は、現在も明科地域の課題の一つである。

『筏 改 め』（筏改番所）

犀川（含む、梓川・高瀬川等）は、古くから筏流しにより、大木を善光寺方面まで運んだようであるが筏流しがいつ頃からは始まったかは不明である。

慶長時代（１６１６）に、「榑木」を「榑木川」（古・梓川）に流し、島内の土場で上げ、陸路（保福寺道経由）江戸へ運んだという。

明科地域の文書（宝永６＝１７０９）に、「川口筏改所」の川口番人を慶長１８＝１６１３に仰せつけられた……」が見える。「改所」は明治４＝１８７１廃止。

『国営製材所』明治４２＝１９０９。開所から４か年の短命製材所。「筏流し」を利用した。　＊「**大逆事件**」の発端をつくった人物は、当製材所の職工。

⑦

『犀川通船』

たびたびの「通船願」は、宿場筋等からの反対があり、実現に約１００年を要した。
　　＊元文４＝１７３９より「通船願」は出され始めた。

「犀川通船」は、天保３＝１８３２から開始された。区間は、松本・白板～新町。

江戸時代は、宿場筋等と通船側とが「規定書」をとりかわし、積み荷の種類などが、制限されていた。松本藩の「商品流通促進・統制」の政策によるものであった。
　　＊旅人（客船ではないこと）・宿継ぎ荷物などは、乗せてはならない。
　　＊宿方の支障にならない品（米穀類・酒・麦・木材・竹・石・瓦……）は乗せてよい。許可品目は５１品。川筋・山間地の特産物も多く含まれていた。

通船により、大量物資の輸送（特に、下り船輸送）が可能になった。

明治時代になり、宿駅の制度が廃止され、積載品の制限が無くなった。それと一緒に「通船会社」設立がみられ、最盛期には３０艘を越す勢いであった。明治の中頃には、「時間船」という乗り合い船も運行された。

明治３５＝１９０２、篠ノ井線開通後、松本～明科間が廃止された。明科（明科駅の荷物）～新町（新町周辺の荷物）間となり、長野方面の荷物は鉄道輸送に切り替わったので、荷量は激減した。

昭和１３＝１９３８、長野～松本間の「犀川線」全通により、陸路輸送が可能になり約１００年間続いた「犀川通船」の役目は終わった。

観光遊覧船は、昭和３０年代前半頃まで続いたが、ダム建設（平ダム）により、それも廃止された。

『渡船場』

江戸時代、犀川にかけられた「橋」は、「熊倉橋」「久米路橋」で、対岸との交通は「渡船」（横渡し）によっていた。

「渡船場」はその地域の交通要地であった。明科地域では、（田沢）・光・塔ノ原・下押野・荻原・小泉などであった。

「渡船」には、人や荷物の他に、牛馬も乗って渡たり、対岸との交流に重要な役目を担っていた。

明治時代になり、次第に架橋工事が進められた。明科地域の架橋では、「木戸橋」明治１０＝１８７７が早く、「犀川橋」明治３５＝１９０２が続いている。
　　＊「田沢橋」明治３７＝１９０４。

これらの「橋」は、木製で洪水で流されることもしばしばであった。鉄鋼・コンクリート橋は、昭和に入ってからである。

犀川・高瀬川など大河は、灌漑用水・生活用水・大量物資輸送など、重要な役目を果たしてきたが、交通・交易に不便さをもたらし、洪水など災害の危険にもさらされた。

大河と立ち向かい、それを制し利用し、生活向上に結びつける課題とその解決の姿は、「里川」周辺住民の重要な生活の歴史でもあった。

『用 水 堰』

近代の堤防工事がなされる以前、明科地域の平地（水田耕作可能地）の大部分が河岸段丘上にあるため、灌漑用の水を引くのに苦労してきた。
　　＊平地は小複合扇状地形が多く、小さな谷川を横切らせる苦労もあった。

用水堰の開さくの歴史は古く、小規模ながら、江戸時代以前にさかのぼるものが多い。

利用した川は、犀川・高瀬川・会田川・潮沢川水系に大別される。

犀川水系……**『光堰』**　光村～塔原村～明科村　　堰長４６町２０間
　　『塔原下堰（前川堰）』『中堰』など

高瀬川水系…**『五か用水』**押野村～塩川原村～荻原村～中村～小泉村　堰長３里余。
　　＊江戸後期、『荻原堰』拡張し連結。多くの規定があり難工事。
　　『内川用水』『荻原堰』　など

会田川水系…『和田堰』堰長約２０町が最長。『柳瀬堰』など小規模

潮沢川水系…小規模な堰。

　　＊堰は、灌漑用水のみでなく、防火用水の役目も担っている。

『長野県水産試験場』

「長野県明科魚類増殖場」昭和２＝１９２７→「長野県明科水産指導所」昭和１３＝１９３８→「長野県水産試験場」昭和５６＝１９８１と名称は変わった。

大正時代からの、犀川堤防工事の進展により、豊かな湧水を利用して、「ワサビ」栽培などが始まり、「ニジマス」「川マス」などのふ化場施設もつくられていった。

昭和３０年代、「ニジマス」が欧米輸出の花形になり、受精卵や稚魚など東洋一の実績をあげた。また、地元民間養殖業振興に寄与した。

その後、湧水量の減少・水質汚染などから、昭和５４＝１９７９、押野に試験池を開設し研究を進めている。近年、ニジマスとブラウントラウトをバイテク技術で交配した「**信州サーモン**」（学名はない）を信州のブランド品として提供している。

なお、現在も養殖されている淡水魚は、「信州サーモン」「ニジマス」が主力。

「犀川漁業協同組合」（設立　昭和２８＝１９５３）では、年々、淡水魚の稚魚を放流し、増殖をはかっている。明科地域では「ウグイ（赤魚）」が主なものである。

夏になると、「つけば（つきよば）」で、野趣豊な川辺での「あかうお焼き」を楽しむことができる。

『ワサビ』

犀川沿い「御宝田」での「ワサビ」栽培は、大正時代末頃から始まったが、労力不足などから、その生産量は少ない。主流は穂高地域である。

⑨

大河をめぐって ［祭り・観光・学習など］ ～その２～

『神 社 ～祭 り～』 ～「御船曳き行事」を伴う～

明科地域で、明治５＝１８７２、「村社」として登録されたものは１３社である。（後に合併して、１２社）

その他、歴史はあるが、無格社も数多くある。（昭和３９年の神社本庁所属神社は、村社も含めて２７社となっている）

明治４０＝１９０７、祭祀を十分にさせるため、無格社の合祀を奨励した。他地域では神社合併がすすめられた結果、神社数が約１／２になった。明科地域では、小泉神社のほかは、合併ゼロであった。

「村 社」の祭 り ＊**ゴシック神社名**は安曇野市指定文化財を所有しているもの

	祭りの時期	地区名	山車（だし）	
光五社	秋	光	ふ ね	
犀宮社	秋	塔ノ原	ふ ね	かつては、「ふね」だったという
広田社	秋	明 科	鮒付ける・ふね形にはしない	上生坂と同じという
諏訪社	秋	大 足	ふ ね	
藤城社	秋	潮 沢	ふ ね	
八幡宮	秋	上生野	ふ ね	
潮神明宮	春	潮	ふ ね	（浦安の舞）
正八幡宮	秋	押 野	ふ ね	（獅子舞）
荻原神社	秋	荻 原	ふ ね	
高根神社	秋	塩川原	ふ ね	
和泉神社	秋	小 泉	ふ ね	
大己神社	秋	中 村	ふ ね	

＊かつては、大勢の人が集まり、親類縁者を招いたりして賑やかな祭りが多かった。芝居や演芸会なども行われ祭りを皆で楽しんだが、娯楽の多様化・若者の減少・村祭りへの意識変化などにより、以前の賑わいが無くなったところが多い。

＊明科地域全域にわたって、山車を「ふね」形で飾りつける。
「藤城社」や「**矢ノ沢山の神神社**」（無格社）がある集落は、明科地域でも標高が高く、山深い場所である。その様な高地の山車でも「ふね」で飾りつける。

ただ、交通事情・曳き手不足などにより、「御船曳き」がままならず境内のみにするか全く飾りつけをしなくなった神社もある。

＊「**御船曳き行事**」が各神社にある（あった）ということは、犀川・高瀬川を挟んで大社「穂高神社」との関係または影響があるように思われる。

「犀宮社」……治水伝説。穂高神社の真東に位置する。穂高神社の人形師が飾りつけに来る。かつては「三宮大明神」とも呼ばれ、穂高神社の三宮とも通じるのではないかという説もある。
「正八幡宮」…この神社の総代が穂高神社の行事に参加することがあった。この神社は、かつて、「川会神社」であると言われたこともあった。「大綿津見命」も合祀されている。治水伝説が残っている。

『明科フィッシングランド（含・水族館）』

昭和４２＝１９６７、「水郷あかしな」らしい施設が誕生した。明科町と松本電鉄との合資で設立。

遊園地・レストラン・釣り堀、２００種類の淡・海水魚。プールなど一日中遊べる施設として人気があったが、冬場、入場者激減などで、昭和４７＝１９７２閉館となった。営業期間５年間という短命に終わった。

『龍門渕公園』　（含・あやめ祭り、薪能）

昭和５１＝１９７６、から「龍門渕」一帯を「水」に関係をつけて開発を開始。
　＊「全国水郷の郷百選」に認定される（豊科・穂高地域とともに）

「町民プール」完成。昭和５６＝１９８１。→安曇野市になり閉鎖。

「アヤメ・フェスティバル」昭和６０＝１９８５。→「**あやめ祭り**」
　＊平成７＝１９９５、アヤメを町花に制定。
　「能舞」昭和６０＝１９８５。→平成３＝１９９１、第１回「水郷明科薪能」→
　　→「**信州安曇野薪能**」

「**カヌーコース**」の設置。　中部日本カヌー大会など開催。

『御宝田（三川合流地）』

平成４＝１９９２、「**御宝田人工池**」にハクチョウ初飛来。

平成１６＝２００４、自然体験交流センター「せせらぎ」開館。この一帯を親水公園「**水辺の楽校**」として、グランド・マレットゴルフ場・水辺散策・探鳥・水生植物・水棲動物観察などを行う。「**せせらぎ**」は、その拠点施設。

親水公園の一部を利用して「**安曇野花火**」**大会**を開催。

＊河川敷は、恒久施設の建設は許可されない。近年の洪水で、仮設施設が流失したことがあった。

平成２３＝２０１１、「**松本糸魚川連絡道路**」**起点**周辺ルート案が発表された。

Ａルート（三川合流点をまたぎ直線的に進む）
Ｂルート（合流点を迂回するルート）

＊地下水への影響（環境負荷）、複雑な橋の構造による建設費などを考慮して、長野県は、Ｂルートを中心にしたい様子。
＊**新設ＩＣ**もこの付近に建設されるという。
＊三川合流地が、かつて、高速道明科トンネル掘削地が中信地区の話題を集めたが、その近くの「三川合流地」が、課題を持ちながらも、注目されることとなりそうである。

かつて、物流拠点の一つであった「三川合流地」が、再び脚光を浴びようとしている。

里山をめぐって

「里 山」……『森林用語辞典』　日本林業調査会編

集落や人里の近くにあり、かつては、薪炭用材や山菜などを採取していたところ。
里山は、人間生活とかかわりが深く、地域の経済活動と密着していたが、エネルギー革命や土地開発などによって失われる傾向にあり、維持・保全への危機感が強まっている。

明科地域は、山林原野が総面積の７０％近くを占めている。かつては、そのほとんどが、「里山」であった。

俗に、「**耕して天にのぼる**」と言われるように、傾斜地を可能な限り耕して耕地化し、不可能地は、主に薪炭・秣（まぐさ）・苅敷（かりしき）を採取するために利用していた。

薪炭→灯油・ガス、牛馬→耕作機器、苅敷・堆肥→化学肥料、徒歩→自動車・列車
これら生産・生活の変化は、「里山」の意味を大きく変貌させた。

『北村遺跡・縄文人のタンパク源』

約５，０００～４，０００年の縄文人骨出土。

北村縄文人骨に蓄積した炭素と窒素の「安定同位対比」（生涯にわたり何を主に食べていたかを復元する方法）による食性分析の結果、タンパク質の７４％は、ドングリ・クルミ・クリなど植物性からなっていた。

古くから、河岸段丘上・山間地で生活していた人々は、大部分の食料を山の産物から採取していたこととなる。

犀川・高瀬川・小さな谷川からのタンパク源補給は、当然考えられるが、その比率は低い。川からの漁獲量が、その後もあまり多くなく、漁獲が季節に左右されていたことなどから、この地域の住民は、段丘平坦部・山地の傾斜地からの産物に頼ることが続いていった。

『紅葉鬼神』　～伝　説～

潮沢区の山地奥（物見岩）に、「紅葉鬼神」という女の鬼が住んでいた。平安時代の初頭頃、坂上田村麻呂により征伐されたという。

安曇野に伝わる「八面大王」伝説の明科地域版である。

近年、民話作家などにより、盗賊ではなく、中央政権に抵抗した民衆のリーダーであったのではないかという考え方が発表されている。

「里山の恵」により支えられた民衆力を象徴しているように思われる。

『塔原城跡』

明科地域には、戦国時代の山城跡や館（やかた）跡が非常に多い。山城跡（含・物見跡）は、推定されるものも含めて約２０か所（含・光城山）ある。

明科地域に山城跡が多いのは、中世になり、光氏・塔原氏・大葦（大足）氏が光・中川手地区に、仁科氏・日岐（丸山）氏が陸郷・七貴・潮沢・上生野地区に、会田氏が潮山中地区に、潮沢東部に青柳氏が、勢力を伸ばしていたためである。

塔原城跡は、長峰山の尾根先に、５０ｍ×５００ｍの広さがあり、規模は大きい。天文２２＝１５５３、武田勢に攻められ自落した。その後、天正１１＝１５８３、小笠原氏に城主が暗殺された時、塔原城も破壊れたものと思われる。

塔原城の南に位置している「光城跡」は、光氏の山城であり、規模も大きい。

なお、明科地域の山間部・河岸段丘部などに、城・見張所・館等に関係した地名が、２００近くある。

「里山」を中心に、それぞれの「氏」が勢力を伸ばそうとしていたことがうかがえる。

『入会（いりあい）山論』

藩の林・寺社林・百姓持山以外の山や林は「入会山」と呼ばれている。ここは、薪炭材・肥料や飼料の供給源であった。

個人の百姓持山が増加するにつれて、持山のない百姓は、林産物採取が不自由になり山境や採取範囲・採取品目などをめぐって争うことが多くなった。

入会山と入会村の例

「光　山」……光村（山元村）。田沢・重柳・踏入・寺・吉野・熊倉・鳥羽・飯田村

「名九鬼山」…潮山中村（山元村）。潮・潮沢・塔原・明科村

＊入会権を持つ村は、隣接する村ばかりでなく、犀川を挟での村もあった。

「塔原山と大足山」…塔原・大足村が山元村、大足・塔原村が互いに入会村となっている場合もあった。

規約の例

毎年、採取解禁日（山の口明け）を決め、それ以前は採取禁止。ただし、山元村は、１日先に入山できたなど。

一般的に「入会山」は中世にさかのぼることが多いといわれている。中世では、同じ領主の勢力範囲であったものが、江戸時代に行政範囲が異なる場合が起こり、かつての権利を主張する場合が多い。

江戸時代初期～中期の「山論」は、境界の争いが多く、中期～後期は、採取権の確定を目指すようになるのが一般的であるといわれている。

⑬

『商業的農業・林業品』

古代においては、朝廷へ年貢として納めた「麻」（麻布の衣袴）があったようであるが、史料不足でよくわからない。

「煙草（莨）」は、江戸時代より、山村農家の主要な換金作物であった。松本からの移出商品中第一位を占めていた。

「煙草」は、煙草商によって、陸路、江戸・尾張などへ運ばれた。それと一緒に、江戸・尾張などの文化が農村へ入るようになり、学問を身につけようという気運も高まってきた。また、生活に幾分かの余裕も生れ、祭り・芸能・旅など楽しみや見聞を広めることも多くなっていった。

山間部に比較的立派な社堂や石造像・碑なども建立されていった。

「薪・炭」は、自家用の燃料以外に、売り物として重要な産物であった。

『養　蚕』

明治時代中期頃、生糸輸出が国策となり、にわかに「養蚕」が農村に行き渡った。

明科地域は、水田より畑地が多く、養蚕には適した場所であったため、全域で盛んになった。しばらく、「養蚕時代」ともいえる時代が続いた。

大正１０＝１９２１、明科に、「組合製糸三栄社」が設立された。（昭和１７＝１９４２まで、操業）

昭和５＝１９３０、繭値の大暴落などから、農村不況の時代となった。その後も、転換作物もなく、養蚕は続けられたが、食料不足の時代になり、畑地・揚水による水田（開田）へと変わっていった。

開田は、施設老朽化や減反政策などで、現今は減少している。

『天平の森・長峰林道』

昭和４１＝１９６６、山村振興林道として着工。　昭和４５＝１９７０、川端・井上・東山三氏が長峰山を訪れた。

この年、長峰林道が白牧地区まで届く寸前、白牧地区は解散し移住した。

平成７＝１９９５、森林体験交流センター「天平の森」が、安曇野眺望・天体観測・キャンプ場など森林体験ができる施設として開館。

＊この年、全国水の郷百選に認定。明科地域では「川と山」双方が、観光・学習憩いなどの拠点を得たこととなった。

有形文化財　～寺社関係～

明科地域には、寺（含・堂）や神社（含・小部落の神社）が多くある。

特に、山間地で、小部落が点在している所に多く分布している。

江戸時代の『神社仏閣書上帳』（川手組・元禄１１＝１６９８）『村明細帳』（池田組・寛政元＝１７８９）に記載されているものを拾ってみる。
　＊史料が川手と川西では異なる。史料不明の部分もふくまれている。

神社……	川手	８３社	川西	３３社	・「川手」は犀川東側 ・「川西」は犀川西側
寺・堂……	川手	７＋３２	川西	３＋１２	

安曇野市指定寺社関係文化財（含・県宝）

「潮神明宮本殿」……（潮）　神社建築、神明造、明和８＝１７７１
「光五社本殿」　……（光）　神社建築、入母屋造、明治４４＝１９１１
「大己社本殿」　……（中村）神社建築、流造、寛政７＝１７９５

「春日社回り舞台」……（潮沢）神社建築、文政９＝１８２６

「宗林寺本堂」　……（光）　寺院建築、入母屋造、江戸中期
「雲龍寺本堂」　……（塔原）寺院建築、入母屋造、明和６＝１７６９
「泉福寺本堂」　……（鉾沢）寺院建築、寄棟造、文化７＝１８１０

「長光寺薬師堂」……（光）　寺院建築、寄棟造、元禄１６＝１７０３
　　＜県宝指定　答申　中＞
「光久寺薬師堂」……（大足）寺院建築、寄棟造、元禄３＝１６９０
　　＜県宝指定　答申　中＞
「名九鬼地蔵堂」……（潮沢）寺院建築、江戸末期
「泉福寺薬師堂」……（鉾沢）寺院建築、入母屋造、文化５＝１８０８

「宗林寺山門」　……（光）　寺院建築、鐘楼門、天明元＝１７８１
「雲龍寺山門」　……（塔原）寺院建築、楼門、天明３＝１７８３

「木造日光菩薩立像・月光菩薩立像」…（大足）寄木造、桧素地仕上、善光寺妙海
　　文保元＝１３１７　＜県　宝＞

「泉福寺金剛力士立像」　……（鉾沢）寄木造、桧材、室町初期
　　＜県　宝＞

「長光寺木造薬師如来坐像」　……（光）　一木造、桂材、室町初期
「雲龍寺木造大日如来坐像」　……（塔原）寄木造、桂材、室町初期
「龍門寺木造聖観音菩薩坐像」　……（明科）寄木造、桂材、南北朝時代
「毘沙門堂毘沙門天立像」　……（大足）一木造、桧材、室町中期
「漆久保弥勒堂弥勒菩薩坐像」　……（潮沢）寄木造、延宝５＝１６７７
「矢越阿弥陀堂阿弥陀如来坐像」……（潮沢）　室町末期
「小芹薬師堂薬師如来立像」　……（潮沢）　江戸中期
「上生野観音堂聖観音坐像」　……（上生野）一木造、　室町末期

＊その他、寺社彫刻・曼陀羅図・絵画等は略す。

⑮

石造文化財　（含・安曇野市指定）

明科地域には、石像や碑石が非常に多い地域である。

『明科の石造文化財』（昭和５６年発行）によると、１９００基を越すという。

そのうち、半数近くが、山間地に分布しているという調査結果を報告している。

その理由として、簡単に結論は出せないがとことわって、次の８点を上げている。
（一部筆者が要約した）

1，戦国時代の山城・とりで・見張所などが多く、そこに配置された子孫が多数住み着き、山地を開墾したこと。
2，多くの小部落に分かれ、そこに、社や堂をたてたこと。
3，自然災害など厳しい自然条件により、信仰に頼ったこと。
4，「講」の活動を盛んにして、相互援助・慰安を求めて団結したこと。
5，素朴な気風が、民間信仰を長く保ち、受け継いだこと。
6，「煙草」栽培により、現金収入があったこと。
7，各地へ通ずる道路や小道が多かったこと。
8，手近かな所に、加工しやすい砂岩が多く、石工を頼まなくても素人で巧者な人は加工できたこと。

石像や碑石の種類

馬頭観音（含・大日如来）<馬頭……４０９	…… 大日……１５>	４２４基　＊大日は牛馬守護や供養としても信仰
常夜燈	……	１９６
観音・薬師・阿弥陀他	……	１６５
道祖神	……	１４６
神像・祠など	……	１１６
以下　略		

安曇野市指定石造文化財

「池桜石造接吻道祖神」……	（潮沢）	砂岩　江戸中期　丸彫り　接吻
「下押野青柳庵石仏」……	（押野）	３４番観音　２揃い　江戸時代
「小泉梵字庚申塔」……	（小泉）	寛文２＝１６６２　明科最古の庚申塔
「宗林寺石造宝篋印塔」……	（光）	寛永年間　石川数正供養塔という
「光久寺石造宝篋印塔」……	（大足）	室町末期

指定文化財以外　～　特徴的なものの一部　～

「柏尾抱擁道祖神」……	（潮沢）	丸彫り　抱擁　立体像は池桜とこの２体
「覚明像」……	（潮沢）	修験道　霊神像
「池桜馬頭観音」……	（潮沢）	みちしるべ（道標兼用）
「地蔵」……	（光）	寛文２＝１６６２　年号銘明科地域最古地蔵
「大月亀吉算塚」……	（光）	明治３７＝１９０４　算塚は松本平唯一
「法音寺宝篋印塔」……	（塔原）	室町時代　光氏の墓と伝える
「龍門寺地蔵」……	（明科）	昔、龍門渕にあった
「金山青面金剛」……	（潮）	明治中期　伊那の石工作
「花見十八夜塔」……	（潮沢）	十八夜塔は明科唯一
「下押野道祖神」（文字碑）	（押野）	安政２＝１８５５帯代千両は松本平で最高

明科地域で大河（含・湖、八面大王）に関係した伝説　～明科１回目　補助資料～

松本盆地形成期（約７０万年前～）、神話の時代、古代国家創始時代、律令国家開始～中興の時代（奈良～平安初期）と、長期にわたって、地域の人々が伝え聞き、また、他地域の伝説や昔話などが入り交じり「伝説」は作られ、変容してきた。

明科地域の伝説（伝承）も、時代的飛躍や時代の前後などがみられるが、人々が伝えようとしたものには、壮大なロマンと傾聴すべき歴史的示唆に富むものが多い。

これらの伝説から、安曇野市全域を一体としてとらえていることがわかる。

1，『犀宮社』（塔原・宮本）と泉小太郎

昔、鉢伏山に犀龍が住んでいた。高井郡高梨に住む白龍という夫を迎えて、泉小太郎を生んだ。

ところが、小太郎という人体を生んでから、母の犀龍は、自分の姿が蛇に似ていることを恥じて湖水の中に隠れてしまった。

小太郎は、母の犀龍をたずねて、あちこち探すうちに、熊倉の奥、尾入沢でやっと会うことができた。

その後、母の犀龍は、「私は諏訪大明神の化身です。お前のため、また、人のためこの水を落として陸地にしてやろう」というと、小太郎を背中に乗せて、山清路の巨岩をつき破り、更に下流の水内に行き、白龍を連れて仏崎の岩屋に入って暮らすことにした。安曇平の広大な土地はこの時にでき、小太郎は、有明の里で暮らしたといわれている。

母の犀龍は、その後、塔ノ原に上陸し、『犀宮』にまつられている。また、体が赤かったことから、「赤龍」といわれ、犀宮で、「**赤幟**」を立てるのはこのためだといわれている。

『犀宮』の祭神。
日本武尊（ヤマトタケルノミコト）大山祇命（オオヤマズミノミコト）建御名方命（タケミナカタノミコト）
この三神に、「**犀乗大神**」を加える人もある。

また、「**八面大王**」と関係する、『八面大王社』の小宮がある。

2，『正八幡宮』（押野）と穂高見命

大昔、安筑の平が、湖であった頃、大綿津見命（オオワタツミノミコト）の御子の穂高見命（ホタカミノミコト）という神様が、押野崎から山を切り開いて、犀川を作り、湖の水を越後の海に流した。

その後、神孫の安曇比羅夫（アヅミヒラフ）という人が、穂高見命をまつり、押野崎の川の会う所に、綿津見命と豊玉比売命（トヨタマヒメノミコト）をまつって、『川会神社』と称した。

慶長元＝１５９６、６月の大洪水で、宮殿・社地共に流失したので、『八幡宮』の社殿へ御遷座した。

この時より、川会神社という名称は、いつとなくすたれて、ただ八幡宮の名だけが残った。

しかし、毎年、7月1日の祭事には、葦で新床を作り、新莚を敷き神座を設けて、川の会する方に向かって、神酒・神饌等を供え、諸川の水害を除くことを祈願している。これを「川会の神事」と申し伝えている。

また、穂高神社との因縁が深いので、毎年、穂高神社の祭礼には、当社の氏子総代の一人が祭典に参列している。現在もそれは続いている。

なお、近年、地域有志が、かつての伝承から、下押野公民館付近に、『川会神社』『日光小太郎菩薩』の小石碑を建立した。

3, 湖（含・泉小太郎）に関する伝承

①「舟つなぎ石」　（光・白牧）
白牧・江ノ島といわれるところにある。湖であった頃、船の綱を結びつけた。
対岸の穂高・牧にも舟つなぎ石があるという。

②「舟こば」　（潮沢・岩州）
「舟こば」というくぼ地。海だったころ、船着き場。

③「舟つくぼ」　（上押野）
「舟つくぼ」は、湖の頃、穂高の牧と交通していた舟の舟つき場。

④「舟つき場の欅」　（七貴・塩川原）
塩川原の氏神様の欅の古木。舟つき場で、舟をつないだ木の枝が根づいたもの。

⑤　「泉小太郎の墓」　（潮沢・小日向）
昔は、「潮神明宮」があり、「宮城」という地名となった。古い祠形の墓は、泉小太郎をまつった墓だという。

4, デーラボッチャ（巨人伝説）　＊デーラボッチ、デーラボーともいう。

①「能念寺山のデーラボッチャ」（塔ノ原東部山地）

デーラボッチャが座った尻の跡。「金玉池」とか「平窪地」と呼んでいる。
「大足」（地区名）は、足を伸ばしてへこんだ土地。

②「潮沢のデーラボッチヤ」　（潮沢・名九鬼）

近くの尾根をひとまたぎにした足跡で窪地となっている。
＊峰の対岸（矢越・千本松の奥）にも窪地がある。

③「塩川原のデーラボッチャ」　（七貴・塩川原）

「くねの中」という窪地。足跡だという。
＊近くの荻原地区にもある。